

イラクの子どもを 救う会 NEWS

No. 15

Jan. 2008

発行：イラクの子どもを救う会 الجمعية اليابانية لإنقاذ أطفال العراق
発行人 = 西谷文和 大阪府吹田市泉町 1 - 21 - 5 - 102
TEL&fax: 06 (6192) 7033 URL: www.nowiraq.com MAIL: nishinishi@r3.dion.ne.jp

【イラク最新報告】

その後のムラートくん

西谷文和(文・写真)

前回ご紹介したムラートくんその後であるが、手術は成功したようで、今では写真のように、ベッドから起き上がれるまでに回復した。13歳の少年の生命力に、あらためて驚愕する。彼の手術については、2007年11月に当会から送金した募金が活用された。この紙面をお借りして、募金いただいたみなさんに改めて御礼申し上げます。ありがとうございます。

現在、ムラートくんはスレイマニア大学病院に入院している。現地からは、イランのテヘランに行けば、さらに進んだ右目の治療ができるので、イランへ行きたいというリクエストが入っているが、さすがに資金的に困難なので、しばらくはスレイマニア大学病院で、医師の指示に従って治療を続けてほしい旨のメールを送っておい

た。
残念ながら右目は失明しているので、義眼を作ることになる。彼はまだ13歳なので、体が大きくなる。したがって義眼は何回か、その成長に合わせて作り変えなければならぬ。彼への支援は、数年間は続けていきたいと考えている。



回復しつつあるムラートくん

ムラートくんの支援と並んで、重要なのは「避難民キャンプ」である。スレイマニア市郊外にある「カラア避難民キャンプ」は、粗末なテント張りのキャンプで、雨漏りがする

し、冬はかなり寒くなるイラク北部で、1月～3月期をどう乗り越えるか、が問題である。

そこで、現地のクルド通訳ファラドーンと相談し、募金で毛布を買って、それを配ろうと思う。日本のホームレスも「冬を越せるか」が勝負である。イラクも同じ。夏は50度近く気温が上がるイラクであるが、冬は氷点近くまで気温が下がる。毛布がなければ、おそろく子どもや老人は危ない。

そこで今号では「毛布募金」をお願いし、一定額集まり次第、現地に送金することにした。私は今年3月にイラク入りする予定なので、その際スレイマニア市を訪問できれば、「カラア避難民キャンプのその後」をレポートしたい。

カラア避難民キャンプの子ども



CONTENTS

- 西谷文和と行くスタディーツアー「イラクと戦争の実像に学ぶ旅」もうすぐ受付終了 今年3月にダマスカス、アンマンでのイラク人難民との交流の旅の案内です2
- 私の原点イラクにこだわる理由(西谷文和)3
- DVD販売案内4
- 薬・カンパ募集4
- ダマスカス旧市街案内(寺園敦史) ツアー訪問地紹介です5
- 続イラク 戦争の実像 西谷代表による今年10月のイラク取材報告。毎日新聞連載の採録6

西谷文和と行く イラクと戦争の実像に学ぶ旅

スタディーツアー参加者最終募集

《戦争の実像》をこの目で
確かめよう

イラクの子どもを救う会で、戦争で被害にあったイラク人と交流するスタディーツアーを企画しました。テロとの戦いなどという理由でアメリカや日本がいまイラクで何を行っているのか。当会でやっている子どもたちへの支援の現場はどういう状況なのか。そういった現実にふれていただくことを目的としたツアーです。

実施日はイラク戦争開始5周年直前の2008年3月。行き先は、100万人を超えるイラク人難民が住んでいると言われるダマスカス(シリア)とアンマン(ヨルダン)です(イラクには行きません)。ダマスカスではイラク人難民と交流、アンマンでは現地支援活動をしているNGOを訪問する予定。

ツアーのガイドは当会代表の西谷文和がとめます。西谷代表はイラク戦争開戦前から今まで現地取材をくり返し、イラク戦争の実像を報道し続ける日本で数少ないジャーナリストの一人です。シリア、ヨルダンという「危険な国」と不安に思われる方もおられるかもしれませんが、実際はまったく違います。むしろ欧米などよりも安心して旅行できる国といえるかもしれません。日本からも毎年大勢の観光客が訪れています。現地を訪れてみると、「危険」「怖い」というイメージこそが、日本には中東やイスラム教についていかに偏った情報があふれていることの証明であるか、実感で

予定しているプログラム

1日目	関空(23:15)発ドバイ(アラブ首長国連邦)へ
2日目	ドバイ着後乗り継いでアンマン(ヨルダン)へ(9:20着) アンマンでイラク難民支援を行っているNGO事務所訪問。その後死海へ(死海泊)
3日目	ダマスカスへ向けて出発。途中、アンマン近郊のパレスチナ難民キャンプ訪問(ダマスカス泊)
4日目	「リトルバグダッド」などイラク難民居住地域訪問(ダマスカス泊)
5日目	ダマスカス市内観光、その後バルミラへ(バルミラ泊)
6日目	バルミラ観光(バルミラ泊)
7日目	ダマスカスへ。その後空路ドバイへ(ダマス16:35発)、ドバイで乗り継ぎ帰国の途へ
8日目	関空着(17:20)解散

きると思います。

今回のツアーでは、世界遺産にも登録されているバルミラ遺跡、ダマスカス旧市街や、ウマイヤド・モスク、死海など、有名な観光地の見学もを行いますので、こちらもぜひお楽しみください。

日程 2008年3月7日(金)～3月14日(金)

定員 15～20人

費用 一人3万8000円(全行程宿泊、食事、現地移動交通費付き)

問い合わせ先

電話・ファックス

06(6192)7033(当会事務所)

080(5326)6775(西谷)

企画「イラクの子どもを救う会」
手配「豊田旅行(京都第31522)」

第3回イラク最新取材報告会と スタディーツアー説明会開催します。

とき：2008年1月30日(水)午後6時半～(開場6時)

ところ：大阪市立いきいきエイジングセンター
(大阪市北区菅原町10番25号 Tel.06-6311-3255)

地下鉄南森町・北浜駅下車徒歩5分

毎度のことですが、遠方の方にご不便をおかけします。

内容：

- 1 ツアーで役立つアラビア語とシリアに関するお話
講師 福田義昭さん(大阪大学外国語学部非常勤講師)
福田さんは、在シリア日本大使館専門調査員(1992～94年)をつとめ、長く大阪外国語大学(現大阪大学)な

どでアラビア語教育に携わる。エジプトのノーベル賞作家ナギーブ・マフフーズ研究でも知られる。

- 2 イラク最新情報 講師 西谷文和(当会代表)
ムラトくんのその後のことなど
- 3 スタディーツアー説明会(豊田旅行)
ツアーに関するQ&A、注意事項などについて
疑問点があればお尋ねください。

今回はツアー参加者をおもに対象としていますが、もちろんそうでない方もご関心があれば、ぜひご参加ください。

【column】

私の原点 イラクにこだわる理由

西谷文和

「なぜ市役所を辞めて、この道に進もうと思ったのですか？」とよく尋ねられる。様々な思いがあるので、「これだ！」という理由を一言で述べるのは難しい。

カンボジア

なぜこれだけの人を殺せるのか

もともとジャーナリストという仕事に興味があった。高校時代、カンボジアのポルポト政権が崩壊した。あの頃は受験戦争真っ只中で、あまりニュースなどは見ていなかった。たまたま訪れた本屋に一冊の写真集が平積みされていた。それは『この目で見たカンボジア』。

恥ずかしながら、その時までカンボジアという国の正確な位置さえ知らなかった。カンボジア内戦が、ベトナム戦争によるものだということも後から学んだ。そんな知識はなかったが、一枚一枚の写真が胸に響いた。ほとんどが死体の写真だったのだ。

「どうしてこれだけの人を殺せたのか？」「ポルポトという人はどんな人物なのか？」「なぜこんな大虐殺を国際社会は止めることができなかったのか？」……

写真が衝撃的だったことと同時に、この写真を撮影した中村梧郎という人に興味を持った。中村さんという人がいたからこそ、事実を知ることができたのだ。

しかし高校の日常生活の中では、このようなことは話題にすら上らなかった。迫り来る「共通一次試験」（私はその一期目です）の対策に、先生も生徒も追われていた。

立命館大学理工学部に入學した。1年生で学生自治会の執行委員になった。高校時代、生徒会活動をバカにしていたが、大学ではその中心に座ることになった。それはカンボジアの事実を通じて、私が社会的に成長していたからだと思う。

自治会の先輩に「この本を読め」「あの映画を観に行こう」などと、いろんな面で教えていただいた。学費値上げ反対闘争に取り組み、何日も大学に泊り込んだこともあった。当時学費は年間22万円。それが今や140万円とのこと。隔世の感がある。

「世の中のことを知るには、経済学を学ばねばならない」と感じ、翌年、大阪市立大学経済学部に入學。大学は中核派や革マル派が多く、大学祭の運営方法などをめぐって対立した。今大阪市大にはヘルメット学生など全くいなくなり、派手な立て看板も姿を消した。

私も下手なりによく立て看板を書いたものだが、「市大の名物」がなくなつて少し寂しい。

この頃朝日新聞の本多勝一さんを知った。ベトナム戦争のルポ『戦場の村』や旧日本軍の犯罪を暴く『中国への旅』などを読んで、新聞記者になりたいと思った。

試験に落ちたので、新聞記者にはなれずに公務員になった。結果的には、「公務員になったことが正解」だった。就職してすぐに労組の役員を引き

受けた。毎日交代で労組のニュースを出す。「日刊ニュース」と呼んでいて、月から土まで毎日出す、という体育会系のノリで、無理やり発行した。1991年から2004年まで13年間、私は「宣伝担当」として、機関紙、雑誌などを発行し続けた。

世界各地の戦争取材

公務員のジャーナリスト活動

1993年、大阪の機関紙協会という団体が「カンボジア取材ツアー」を募集した。PKOで初めて自衛隊が海外派兵された。その現場を取材するという旅だ。ポルポト派がまだ残存していて、UNTAAC（国連カンボジア暫定統治機構）のボランティアとして総選挙実施の支援活動をしていた中田厚仁青年が殺されたのは、ツアーの一週間後のこと。応募したのは私を含め4名だった。

プノンペン空港に降り立った時、私たちは「片足の人々の群れ」に取り囲まれた。シャツやカメラを引っ張り、「金をくれ」とせがまれる。一人に渡すとパニックになると思い、ひたすら「ノー、ノー」と言いながら脱出した。「片足の人々」は地雷被害者だった。

カンボジア内戦取材、地雷被害者の取材などを行ったが、言葉が通じず歯がゆかった。あれほど苦しんだ受験英語は一体なんだったのか……

帰国後、英語の勉強を始めた。「駅前留学」などでは「身によくつかない」と思っていたので、ひたすら自習。NHKのラジオ講座が役に立った。ウォークマンに録音して毎日聞いた。この英語学習は今も続いている。

下手くそな英語だが、毎日聞くうちに、「自分の実力がどこまで通じるか」を試したくなる。95年に南ア、ジンバブエ、タンザニアの一人旅を敢行

した。アパルトヘイトで苦しむ黒人の家にホームステイし、酒をあまりながら語り合った。私と同年代の青年が、黒人差別反対で立ち上がり、マンデラ大統領と同じ刑務所の独房に入れられていた。「地球から理不尽な差別をなくさねばならない」と抱き合い、泣きながら酒を飲んだのが、今では楽しい思い出である。

その後、ボスニア、カンボジア、タイ・ミャンマー国境の山岳民族、コソボと、海外取材は発展し、そして9・11事件が起こった。

9・11後はアフガン、そしてイラクである。とりわけイラクで出会った劣化ウラン弾の被害者、クラスター爆弾の被害者の姿が、帰国後も頭から離れず、何とかしなければならぬと感じ、2003年12月に「イラクの子どもを救う会」を立ち上げた。

ジャーナリストへの転身 緊張感と努力を持続すること

こうして振り返ってみると、やはり原点はカンボジアなのだろうと思う。戦争が人を狂気にし、平時では考えられない虐殺を引き起こしてしまう。私が撮影する映像や写真は戦争の一部を切り取ったものに過ぎない。いわば戦争という大きな象を触って、「鼻が長い」「いや、足が太い」など、一部を語っているだけである。しかし全然語らないよりも。ベトナム戦争、カンボジア内戦では、多くのカメラマン、記者が現地入りして、素晴らしいレポートを発信した。しかしイラクではその数は激減し、今や話題にさえ上らなくなった。戦争は今日も続いているのに……。

ジャーナリストに転身したことを決して後悔はしていない。(ポーンナス時期などは「しまった」と

思うことあるが) 毎日が勝負。情報収集に手を抜いたり、語学の学習をサボったりすると、それは手痛い失敗につながってしまう。今は来る3月のツアーとイラク入りを、何とか成功させて、一人でも多くの人を、「戦争の一部」を切り取って帰国し、地域で、職場で、平和や憲法、命の大切さを語ってほしいと考えている。



この写真は、07年10月15日、イラク北部、トルコとの国境付近で撮影したものだ。すでにトルコの越境攻撃が始まっており、PKKが山に逃げ込んでいた。写真では青年には両手があるように見えるが、義手である。アルカイダ系組織の仕掛け爆弾にやられたらしい。滅茶苦茶なことが日常化してしまうのが戦争だ。

好評発売中 DVD「イラク 戦場からの告発」

西谷文和 戦争あかんシリーズ Part 2

2007年6月制作

定価1000円(送料200円)

注文方法

注文本数、お名前、送付先、電話番号を明記の上、ファックスかメールでご注文ください。

ファックス 06-6192-7033

メール nishinishi@r3.dion.ne.jp

イラク戦争の実態と、戦争の背景に存在する利権、アメリカの世界戦略などを、私なりにまとめてみました。この映像を広げただけで、「やっぱり戦争はアカン」「憲法9条を守ろう」という運動に役立てていただけたら幸いです。(西谷)

カンパのお願い

今年3月、スタディツアーでダマスカスの難民を訪ねる際、医薬品を持っていく予定です。風邪薬と胃腸薬(この二つに限定させていただきま)を当会まで送っていただくと幸いです。また、代表の西谷はイラク国内の避難民キャンプに毛布を届ける計画です(本紙1ページ参照。毛布は現地調達します)。下記の口座宛てにカンパをお寄せください。

三井住友銀行 吹田支店

普通3712329

口座名 イラクの子どもを救う会 西谷文和
郵便振込

00970-5-222501

口座名 イラクの子どもを救う会

虹色の翼

ラフイク・シャミの二つ

ダマスカス旧市街案内

寺園敦史

ダマスカス旧市街の魅力は、前号で紹介したような建築や景観的なものだけではない。何よりも世界最古のこの都市で、したたかに生きる人びとがいるからこそ、輝きを保ち続けているのだと思う。

そんな旧市街の人びとの心意気、ずるさ、貧しさ、そしてかすかな希望を、魅力いっぱいに描き続けているのが、ラフイク・シャミという作家である。断言はできないが、実はこのシャミこそ、日本で、おそらくとくに10代の子どもたちにもっとも読まれているアラブ作家なのである。世界的によく知られたアラブの作家といえば、ノーベル賞を受賞したエジプトのナギーブ・マフフーズだろうが、邦訳書点数ではシャミが群を抜いている（原書がドイツ語であることが関係していると思う。それでも単著で8点だけだが）。子どもたちに読まれているというのは、すべて「児童書」の体裁で刊行されているからだ。もちろん、すぐれた児童書がみんなそうであるように、シャミの作品はおとなが読んでも十分引きつけられるものだ。

中でも印象深いのが『片手いっぱい星』（若林ひとみ訳、岩波書店・1988年刊。原書は1987年刊）である。物語の舞台は1960年代前半の旧市街。あらすじをひと言で言えば、ほとん

ど毎年のようにクーデターがくり返されるシリアの不安定な社会を生きて、パン屋の少年「ぼく」の成長物語ということになる。この主人公を通して当時の旧市街の様子を知ることができる。作中語られる旧市街に関するもとも美しいエピソードは次のようなものだ。

旧市街をいつもさまよって物乞い生活をしているちよつと頭のおかしな男（実は複雑なバックグラウンドを持っていることが物語の後半明かされる）を、ある日「ぼく」が助ける。そのお返しに、男はその場で紙に何かを書きつけ「ぼく」に渡す。そこには見たことのない様々な言語で文章が書かれてあり、誰も読むことができない。まわりのおとなの助けを借り、ここはギリシア語のようだが、ここはスペイン語だ、ヘブライ語だと見当をつけ、旧市街に住むそれぞれの言葉を解する住人を見つけて出し、「ぼく」は少しずつ男が「ぼく」に伝えようとしていたことを知るようになる。それは虹色の翼をもつ小鳥にたくして、異文化が交流し合い支え合う旧市街の魅力を再発見させる寓話だった。「明日、新しくできた友だちみんなのところをまわって、この話を教えよう。これは、あの変人がぼくにくれた贈り物だと思っ。おかげで、多くの民族がここで一緒に暮らしているということが、ぼくにもわかった」

「ぼく」が寓話解読のために探し歩いた旧市街の住人は、ユダヤ人、トルコ人、ギリシャ人、イタリア人、スペイン人、クルド人、アッシリア人だった。

話はそれるが、2001年にわたしがダマスカス旧市街で3か月ほど遊んで暮らしていたとき、どこからともなく黒人（しかもみんなでかい）がぞくぞくとやって来る光景に出くわした。多民族都市といっても旧市街で黒人を見かけるのはそれ

までめつたになかったので、驚いて彼らのあとをつけていくと、小さなキリスト教会に入っていた。一人を呼び止めて聞いてみると、おれたちはスーダン人だという。毎週というわけではないが、定期的に旧市街の教会に集まり、祈ったり交流したりするのだと言っていた。日本で黒人が住宅街に何十人も突然集まったりしたら、おそらく周囲は奇異な目で彼らを迎えることだろう。ダマスカスでは冷ややかな視線はまったく感じなかった。こんなことが当たり前のように行われているのも多文化都市の証しかな？

ラフイク・シャミは1946年ダマスカス生まれ。キリスト教徒。1960年代、物語の「ぼく」と同様、旧市街で「壁新聞」という手段を使って反体制運動に加わる。政府に追放されたのか組織の内部対立に嫌気がさしたのか、理由ははっきりしないが1971年旧西ドイツに移住している。ドイツではかなり有名な。

この本のあとがきで訳者の若林さんは、シャミの日本の読者に向けたこんなあいさつを紹介している。今回のようなスタディツアーを企画しておきながら、こう言つのもいささか気が引けるが、わたしもまったく同感である。

「テレビや新聞がシリアについて伝えることといえば、戦争や石油のことばかりです。私の故国には戦争や石油以外にも語るべきことはあるのです。故国に暮らす人びとのこと、また、私の楽しく、そして悲しかった少年時代のことを世界中の若い人たちに知って欲しいという願いを込め、私はこの本を書きました」

* 『片手いっぱい星』は残念ながら現在絶版。図書館などでぜひ探して読んでみてください。

続

イラク戦争の実像。

イラク報告 Oct. 2007

西谷文和 / 文と写真

【第1回】



キルクークの覆面をした警官

2007年11月より毎日新聞（大阪版）に掲載された西谷代表のイラクレポートを採録いたします。同年10月に約3週間かけて行った取材の成果です。

私は10月3日から23日までイラク北部を取材した。現地では連日のようにテロが起こり、以前にも増して子どもや女性、高齢者など普通の市民が犠牲になっていた。人の命ほど尊いものはないはずなのに、戦争を始めた人たちはその責任を取らず、ただ平和に暮らしたいと願う人たちの命が奪われる。イラク戦争の詳細が報道されなくなつて久しい。このシリーズでは、できるだけ現地の生の声を伝えていきたい。

「やっぱりあの子を助けよう」

「やばっ、あいつテロリストと違うか」

凍りつく車内。肩にはカラシニコフ銃、黒マスクにサングラスの男が私たちの車に近づいてくる。ここはイラク北部の都市、キルクーク。油田で有名なこの街は、その油田利権をめくって自爆テロが頻発する激戦地だ。

「俺たちはP.U.K（クルド愛国者同盟）の者だ。日本人を護衛している」

通訳のフアドーンが身分証を見せて、訪問の目的を説明する。男は地元警察官だった。勤務中に顔を見られてしまえば、勤務時間外にテロの標的となるため、顔を見られないように自分自身を護衛していたのだ。

警官のチェックを終えて、自爆テロ現場へ。現場は下町の商店街。一昨日（10月11日）、道端に停めてあった自動車が爆発、10人が死亡、25人が重傷を負った。正面のビル内に破片が散らばっている。「爆発した車の残骸だ」もう一人の通訳、ムルディンが車のホイールを拾い上げる。爆発地点から約20メートル、すさまじい威力だ。

ビルの隣は精肉店。ブロックが崩壊し、地面に血がこびりついている。

「ここで2人死んだ」

ムルディンの指す方向に、別の遺体から流れた血。その血に無数のハエがたかっている。

「デンジャラス！ 日本人は目立つんだ。早く切り上げる」

フアドーンが車から叫ぶ。「テロリストが携帯電話で連絡を取って、襲いに来るかもしれないぞ」。大慌てで車に乗り込み、キルクーク病院へ。

2階の病室にカマルさん（38歳）。先の精肉店でテロに遭った。足、腹、頭に爆弾の破片が飛び込み、これから除去手術を行うところだ。隣の病室へ。奥のベッドに人だかりができています。

「ああ、これはひどい」

ムラート君（13歳）の右目はつぶれ、頭には包帯がぐるぐる巻き。「あー、あー」とあえぐ彼の胸には鉄の破片が13個も。母親は息子の前で泣きはらしている。昨日トウーズフルマートウーという町でテロに遭った。叔父のシンコが英語で訴える。

「頼む。この子を助けてくれ。設備の整った病院に移送させてほしい」

正直、迷った。この子を助ければ、「私の息子も、俺の母親も……」となるだろう。限られた資金とスケジュールの中で中途半端なことはできない。

夕方、ホテルでビールを飲みながら日本へ電話。中学生の息子が出た。

「父さん？ 今イラクやの？ 阪神、中日に3連敗したで」

息子はムラート君と同年。「あー、あー」といううめき声と息子の声が重なる。

「やっぱりあの子を助けよう！」（続く）